



国内宿泊旅行実態

「じゃらん宿泊旅行調査2020」

2019年度の

じゃらんリサーチセンター（JRC）が毎年、1万5000人の国内宿泊旅行者を対象に行う「じゃらん宿泊旅行調査」。新型コロナウイルスの影響を受けた今回の結果だが、上半期の好調や、宿泊費用アップなどの傾向もはっきり把握しておきたい。

新型コロナウイルスに揺れた1年だが
影響は年度末に限られる

今回の「じゃらん宿泊旅行調査」の調査対象期間は2019年4月～2020年3月。対象期間の終盤に、新型コロナウイルス流行の影響を受けていることにまず留意しておきたい。月別の宿泊旅行件数（図1）を見ると、明らかに影響を受けたと考えられるのは2020年3月。1年を通じた縮小傾向は、この期間の宿泊旅行件数減の影響が大きいといえる。

ただし見方を変えると、年度全体が新型コロナウイルスの影響を受けたわけでは決してなく、影響は一部に限られるともいえる。そこで、

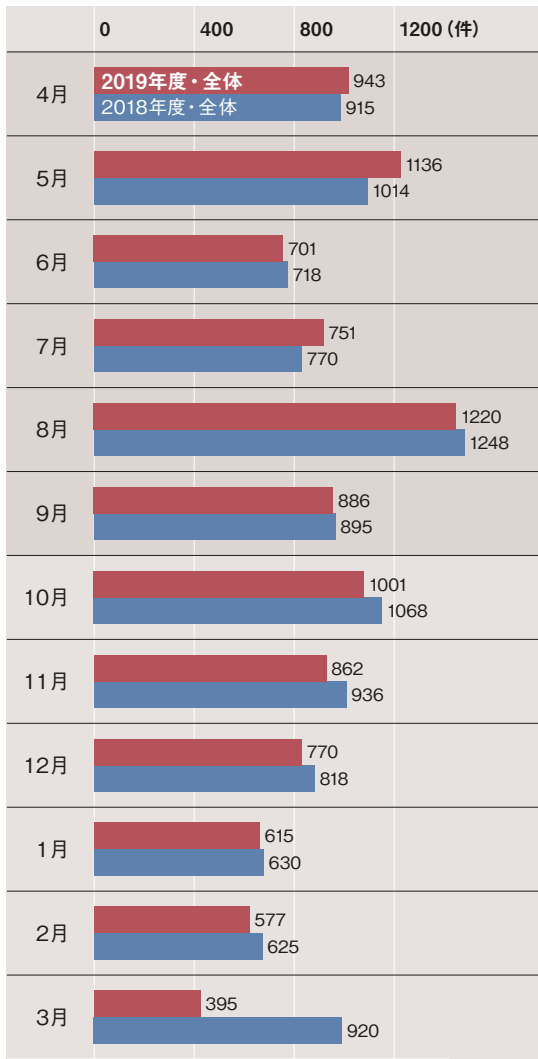
個々のデータを見ていく際には、新型コロナウイルスの影響がどのように出ているのかを意識しつつ、その他の要因についてもしっかりと考えていくようにしたい。たとえば、4月～5月の10連休や9月～10月の台風、10月の消費税増税など、旅行行動に影響を与える出来事は数多くあったからだ。記事の後半では、データを月別に確認することで、より細かい旅行者の動きを追って

いく。

何より、本調査の特長は、国内旅行者全体の行動や志向に関する大きなトレンドを理解できる点にある。対象期間特有の出来事によ

る影響とは別に、全体的な傾向をしっかりと把握しておくことが、突然訪れた危機にあたって打つべき対策を考えるうえでも役に立つはずだ。

図1 月別の宿泊件数



2019年度			
上期・計	5637	前年度比	+1.4%
下期・計	4222	前年度比	-15.5%

※1人あたり最大3回までの旅行件数を積み上げた結果であり、延べ宿泊旅行者数の推計値とは一致しない

旅行市場概観

宿泊旅行実施率は過去最低の53.6% シニア層男女の旅行者減傾向が続く

実施率や旅行者減には新型コロナウイルスの影響も見られるが、変化を細かく見ていくと、他にもさまざまな傾向が浮かび上がる。その一つがシニア旅行者の減少傾向だ。

旅行市場は全体に縮小
とくに女性の実施率が減

「じゃらん宿泊旅行調査」が対象としている旅行とは、国内での宿泊を伴う旅行で、出張・帰省・修学旅行などを除いたもの。こうした宿泊旅行を1年のうちに一度でも実施した人の割合が「宿泊旅行実施率」（表1の2行目、以下実施率）で、今年は全体で53.6%と、前年度から2.8ポイント減の過去最低値となった。旅行を実施した人の年間平均旅行回数は2.7回と微減、旅行1回あたりの平均宿泊数は1.8泊で微増。これらの数値を人口推計値と掛け合わせて得られた実宿泊旅行者数は503.1万人（前年度比5.3%減）、延べ宿泊旅行者数は1億3575万人回（前年度比8.1%減）、延べ宿泊数は2億4393万人泊（前年度比7.7%減）でいずれも前年度より減少した。

実施率を性・年代別に見てみると（P6図2）、前年度からの減少幅が大きいのは35～49歳女性（4.1ポイント減）、50～79歳女性（3.9ポイント減）で、女性の減少がやや大きい。一方35～49歳男性の実施率は前年と変わらず、これまで女性の方が高かった実施率が男女で近づく結果となった。

本来旅行シーズンである3月に、新型コロナウイルス感染拡大が重なり、旅行を取りやめた女性が多かった影響が考えられるが、これについてはP14から紹介する月別データで詳しく見ていきたい。

シニア旅行者では
実施率、旅行回数とも減

旅行1回あたりの平均宿泊数の内訳を見ると、1泊がやや減って、2泊以上の旅行が増えている（P7図3）。2019年は改元に伴ってゴールデンウィークが10連休となったが、こうした影響で1回

あたりの宿泊数が増えた可能性が考えられる。

年間の旅行回数は全体ではやや減っているが、性・年代別に5年間の推移を見ると、今回は50～79歳での回数減が目立つ（P7図4）。年度末の新型コロナウイルス感染拡大がとくにシニア世代に大きな影響をもたらしたことを考えると、すでに旅行をしていた人が年度末の何度目かの旅行を取りやめたというケースもあったかもしれない。

一方で35～49歳男性についてはここ5年旅行回数が減少トレンドにあることが分かる。35～49歳女性については、実施率は低下したが旅行回数は上がっていることから、「行く人は行くが行かない人は行かない」という両極化が感じられた。

こうした結果を踏まえ、改めて宿泊旅行者数を性・年代別に見てみると（P7図5）、50～79歳のシニア層でそれぞれ1割以上減って

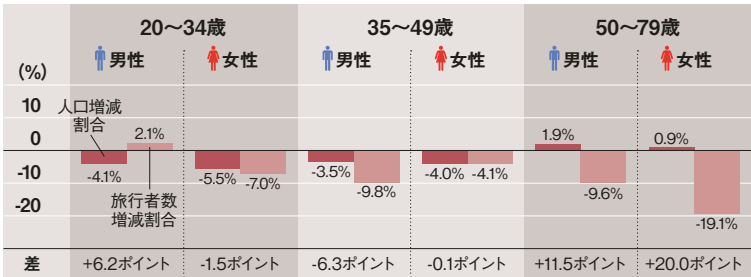
表1 延べ宿泊旅行者数と延べ宿泊数の推計

	19年度	18年度	17年度	16年度	15年度
各年10月1日現在人口推計(万人)	9,388	9,408	9,438	9,475	9,498
宿泊旅行実施率(%)	53.6	56.4	55.6	54.8	56.4
実宿泊旅行者数(万人)	5,031	5,310	5,244	5,188	5,358
宿泊旅行実施者の年間平均旅行回数(回)	2.70	2.78	2.78	2.77	2.86
延べ宿泊旅行者数(万人回)	13,575	14,777	14,556	14,358	15,313
宿泊旅行実施者の1回の旅行あたり平均宿泊数(泊)	1.80	1.78	1.76	1.76	1.75
延べ宿泊数(万人泊)	24,393	26,416	25,646	25,308	26,903

※推計値(太字)の算出は四捨五入していない実データで行った

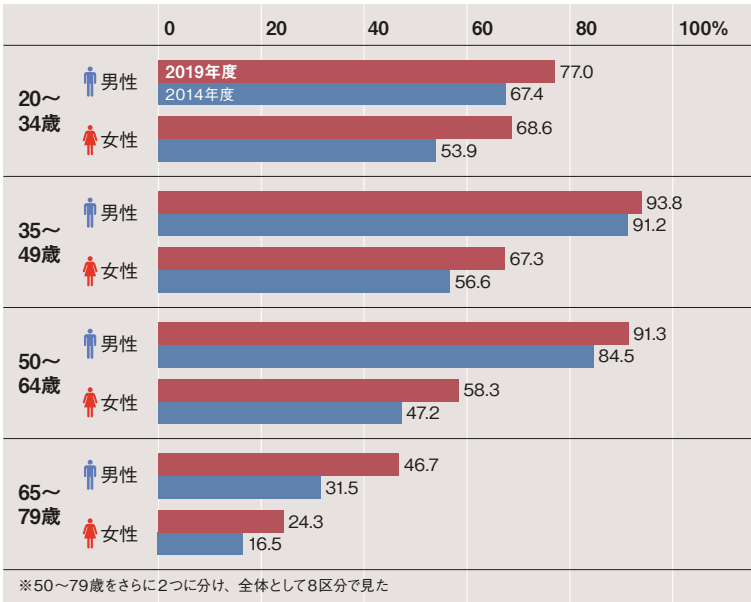
いることもよく理解できる。実施率、旅行回数ともに減ったことで、延べ宿泊旅行者数も大きく減ったというわけだ。一方、20～34歳のヤング層、35～49歳のミドル層については、減少はしているがそれほど大きく減ったわけではない。実はこれらの層については、新型コロナウイルスの影響で大幅マイナスとなった時期を除くと大きな変化はなかったということもできそうだが、その点についても、後半の「月別データ」の項で詳しく見ていくことにしよう。

図6 人口の変化と旅行者数の変化 ※2014年度→2019年度



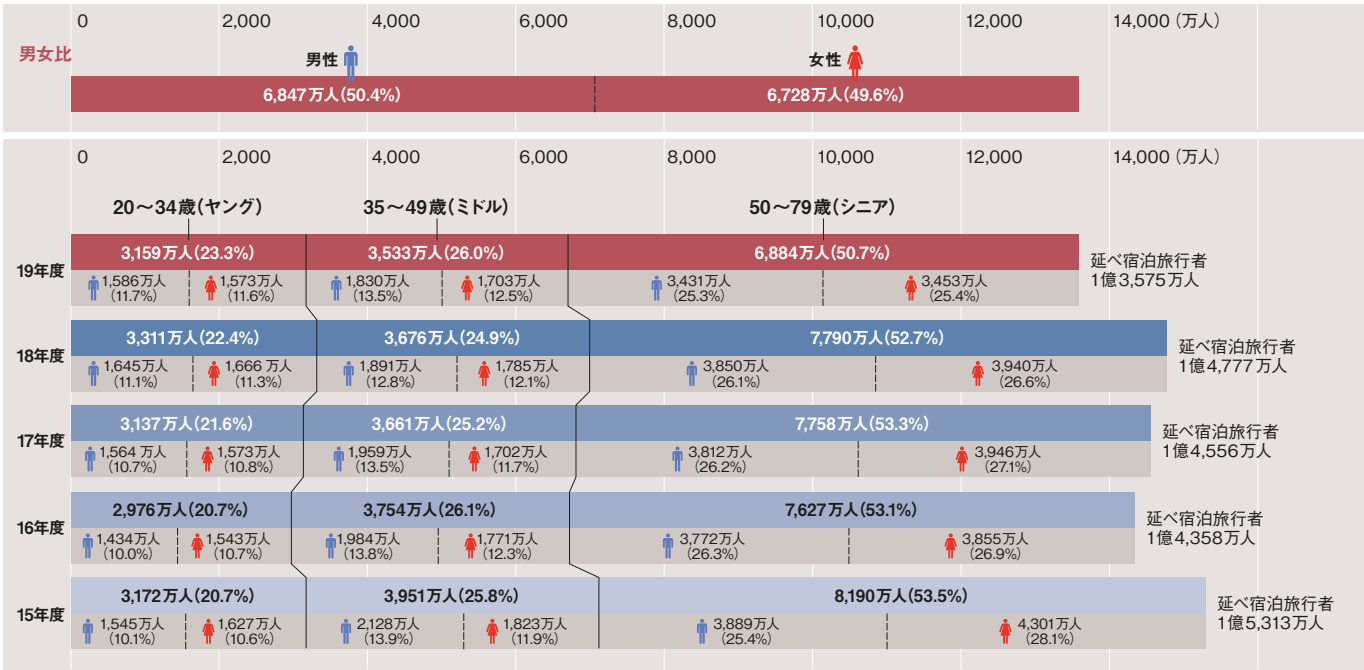
※人口増減割合については、2014年度は「H26年10月1日現在の人口推計」、2019年度は「R元年10月1日現在の人口推計」を使用
※差は四捨五入前の数字で計算しているため、見た目と合わない場合がある。

図7 就業率の変化(性・年代別、8区分)



※50～79歳をさらに2つに分け、全体として8区分で見た

図5 延べ宿泊旅行者数の構成



※推計値の算出は四捨五入していない実データで行ったため、見かけ上の計算が含まない場合がある

図3 旅行1回あたりの平均宿泊数

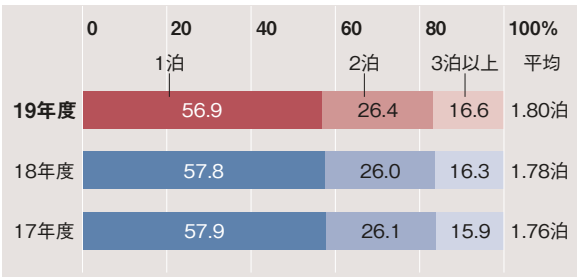
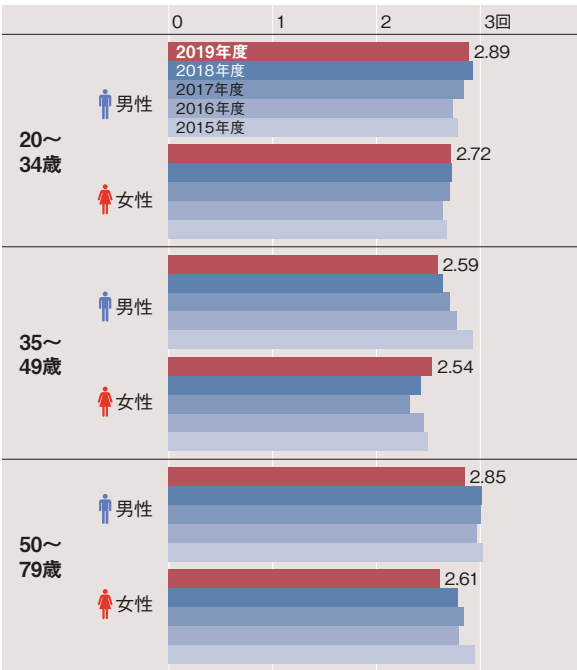


図4 年間平均旅行回数(性・年代別)



就業率アップで
ライフスタイルが変化？

性・年代別の旅行者数の増減についてもう少し掘り下げるため、この5年での人口増減割合と旅行者数増減割合を比較してみた(図6)。人口増減割合はそれぞれの層の人口がこの5年間でどれだけ増えたか、減ったかを表す。50～79歳のシニア層については男女ともに人口はやや増えているが、その他の層では人口減少に入っていることが分かる。旅行者数増減割合は、同様にそれぞれの層の旅行者数の増減を見たもので、20～34歳のヤング層男性でやや増えている以外はすべて減少していることになる。

この形で比較をすると、実は旅行者数が最も増加傾向にあるのは、人口減にも関わらず旅行者が増えているヤング層男性といえる。一方シニア層は、絶対数では多いものの、人口増にも関わらず旅行者は大きく減少していて、旅行者の減少傾向が最も顕著な層ということになる。

旅行に行かなかったシニア層に理由を問うと、「ペットがいた」「自分の健康上の理由」「介護しな

ければいけない家族がいた」などの理由が他の年代より目立つのだが、ここでは就業率の変化に注目してみたい。

図7は、図6と同じ5年間の就業率の変化を性・年代別に見たものだ(いわゆる「定年」前後を分けて見るために、シニア層を50～64歳と65～79歳に分け8区分で集計している)。これを見ると、すべての性・年代で就業率は上がっているが、最も差が大きいのが65～79歳男性。5年前と比べると15.2ポイント増となっていて、今は半数近くが何らかの仕事に就いていることが分かる。女性では50～64歳の就業率が11.1ポイントとこちらも10ポイント以上上がっている。

就業率が上がっているということは、単純にその分多忙になったと考えることができる。全く休みが取れないというほどではなくても、一緒に行く人とスケジュールを合わせるのが難しかったり、休日在家でゆっくり過ごしたいなど、旅行実施率や実施回数を押し下げるには十分な理由になるだろう。こうしたシニア層の事情については、今後もしつかり考えて対応していく必要があるようだ。

図2 宿泊旅行実施率の推移(性・年代別)

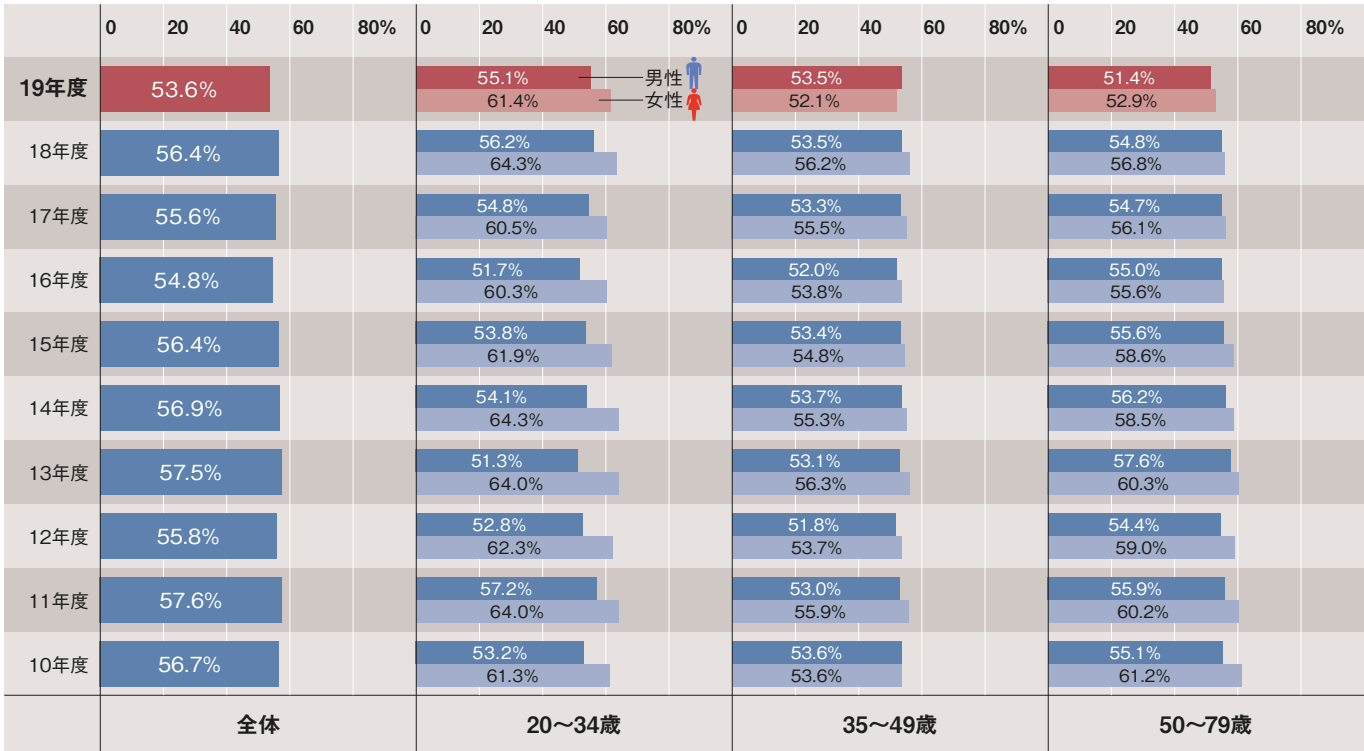
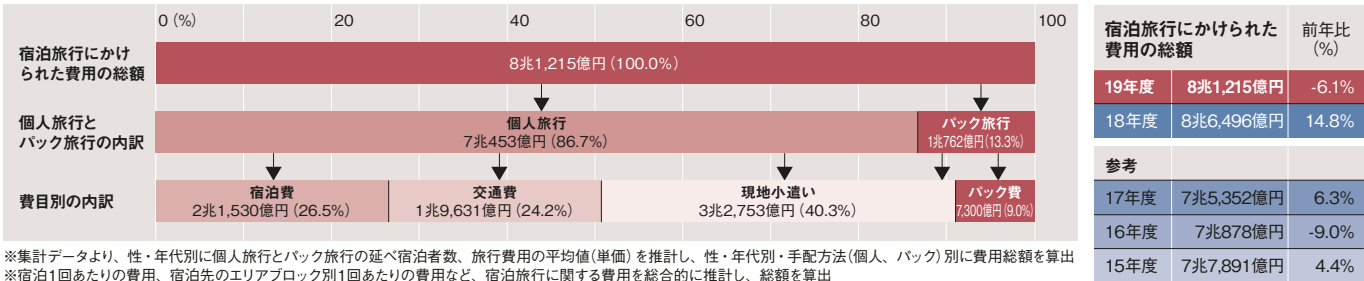


図8 1回の宿泊旅行にかかった費用（大人1人あたり）※トリム1.0％平均 ※追加消費行動が有効回答

	0	20,000	40,000	60,000（円）	0	20,000	40,000	60,000（円）	0	20,000	40,000	60,000（円）	
		宿泊＋交通	現地小遣い	総額		宿泊費	交通費	現地小遣い	総額		バック費	現地小遣い	総額
19年度		35,700円	24,100円 (40.3%)	59,800円		17,500円	16,000円	23,900円 (41.6%)	57,400円		55,500円	26,300円 (32.2%)	81,800円
18年度		34,900円	23,600円	58,500円		17,300円	15,900円	23,500円	56,700円		51,100円	24,100円	75,300円
参考													
17年度		34,700円	16,900円	51,600円		17,000円	16,000円	16,200円	49,300円		50,300円	22,700円	73,000円
16年度		33,000円	16,300円	49,300円		16,000円	15,400円	15,800円	47,200円		46,500円	21,300円	67,800円
15年度		33,800円	17,000円	50,800円		16,500円	15,800円	16,500円	48,800円		47,000円	20,900円	67,900円
		全旅行者				個人旅行				バック旅行			

※2018年度より現地小遣いの設問を変更し、トリム平均の処理も変更したため、経年比較はできない ※百の位までの四捨五入で示しているため、合計が合わない場合がある
※トリム平均とは…… データ全体の上限と下限から一定の割合のデータをカットした残りのデータの平均のこと
ここでは、全体の上下合計1.0%の範囲にあるデータをカットした。金額の高すぎる回答が平均値に大きな影響を与えることを避けるためである

図9 宿泊旅行にかけられた費用総額



ビジネスホテル、車、個人旅行は現代の旅スタイルのスタンダード

利用した宿泊施設(表3)では、昨年までのトレンド同様、今年もビジネスホテルが続伸。2009年度に16・7%だったところから、10年で1・5倍に伸びたこととなる。前回2位だったリゾートホテルは、今年は0・6ポイントダウンで旅館と入れ替わった。そんな旅館もトップのビジネスホテルとは4・4ポイントの差があり、ビジネスホテルの独走態勢が続く。

一次交通(表4)についてもほぼ前年度同様。トップの自家用車利用は5年単位で見ると微減傾向にあったが、こちらは新型コロナ影響で今後の変化が気になるところだ。詳しくはP18からのパート2でご紹介したい。

手配方法(図10)では、個人旅行の割合が前年度から微減したが大きくは変わらず。性・年代別に見

表3 宿泊施設のタイプ(単一回答)
※ベース：宿泊旅行件数

	19年度	18年度	17年度
① ビジネスホテル	25.4%	23.9%	23.1%
② 旅館	21.0%	21.0%	21.8%
③ リゾートホテル	20.7%	21.3%	21.4%

表4 目的地までの主な交通手段トップ3
(単一回答) ※ベース：宿泊旅行件数

	19年度	18年度	17年度
① 自家用車	39.9%	40.1%	39.9%
② 新幹線・特急列車	20.2%	20.5%	20.3%
③ 日本航空や全日空の飛行機	16.1%	16.3%	16.8%

旅の目的(図11)では、「食」と「宿でのんびり」がともに前年と比べて2ポイント以上増加。これにより、2004年度の調査開始以来初めて、「宿でのんびり」が「温泉」を超えて、2位の座を奪った。

と、個人旅行の比率はシニア女性で最も低いながらも86・5%。ミドル男性は93・3%、ヤング男性は93・0%と男性ではとくに比率が高くなっている。

ヤング男性の伸びで増加する「食」「宿」という目的

旅のスタイル

目的は宿・食・まちあるき
二人旅」比率はさらに上昇

国内旅行をどう手配し、何で行き、どこに泊まるのか？旅のスタイルは旅行者のニーズを知る大きな手がかりだ。5年前、10年前からの変化も交えつつ紹介していきたい。

表2 宿泊エリアでの消費行動(宿泊プラン・ツアー以外で行ったこと、複数回答)と推計消費額

		(%)					平均回数	現地での追加消費額 推計 (億円)		追加消費額の 前年差 (億円)
		0	20	40	60	80	平均金額			
買 い 物	直売所や道の駅、 お土産物屋で買い物をする						-	6,564	6,564	-354
		61.2					7900円			
移 動	エリア間や、 各エリア内の移動						-	8,882	8,882	-865
		74.4					8790円			
飲 食	朝食を食べる						1.9回 1070円	828	11,534	-117
	昼食を食べる						2.2回 1670円			-198
	喫茶・スイーツを 食べる						1.9回 1140円			+7
	夕食を食べる						2.0回 3500円			-122
	バーなどで お酒を飲む						1.5回 4250円			-97
	各種体験プログラム に参加						1.5回 3250円			479
体 験 ・ 観 光	観光施設に行く、 遊ぶ						1.8回 4350円	1,968	5,456	-401
	スポーツ、 アウトドアを楽しむ						1.8回 6960円			-39
	健康・美容(立ち寄り温泉、 エステ・マッサージ)						1.6回 2080円			-85
	スポーツ観戦、 コンサート、祭り						1.5回 7680円			-29
	その他の体験・観光						2.1回 4790円			-22
	何も実施しなかった									
		3.9							総額	総額

総額 3兆2400億円

総額 -2400億円

※体験・観光に関する5つの項目「各種体験プログラムに参加」「観光施設に行く、遊ぶ」「スポーツ、アウトドアを楽しむ」「健康・美容(立ち寄り温泉、エステ・マッサージ)」「スポーツ観戦、コンサート、祭り」については、20の活動を5分類に括って算出した割合となっている。平均回数・金額も同様。

※「平均金額」は、「1回目に支払った大人1人分の金額」の平均。「買い物」のみ、「1旅行中主な宿泊地で支払った総額の大人1人分の金額」の平均。

※金額が0円のものは回数に含めない。

※推計消費額の算出方法は①回答者それぞれについて、各消費行動の回数×1回目の単価で各消費行動の消費額を算出。②各消費行動の平均消費額を算出。③全国の延べ宿泊旅行者数に各消費行動の実施割合を乗じて各実施者数を算出。更に各行動の平均消費額を乗じて、消費総額を推計。エリア内での移動費用など上記の項目以外の消費行動や、周遊先や移動中など主な宿泊エリア以外での消費行動は含まれていないため、図9の「現地消費」(約3.3兆円)とは値が異なる。また、四捨五入の関係で見かけ上の計算と合わない場合がある。

1旅行あたりの費用上昇には旅の長期化、増税の影響も

旅行費用

全体では前年度比6・1%減も
1回あたりの費用は上がる

年度末の新型コロナウイルスにより全体の旅行件数が減った影響で、市場規模は縮小したが、実は単価は上昇していた19年度。昨年度特有の事情もありそうなので今後の動きにも注目したい。

5億円。対前年比では6%減となったが、前々年と比較するとまだ高い水準にあり、新型コロナウイルスの影響は今年度についてはまだ限定的だったといえるだろう。

宿以外で夕食をとる人が初めて50%を突破

1回あたりの宿泊旅行費用の総額(図8)は、全体で前年より1300円増の5万9800円となった。個人旅行では、宿泊費、交通費、現地小遣いともにやや増加して、総額は前年より7000円の5万7400円に。バック旅行はバック費が前年より4300円増の5万5500円、現地小遣いも前年より2200円高い2万6300円となり、合計で8万円を超えた。調査方法の変更などで単純には比較できないが、1旅行あたりの費用は上昇傾向。今年度については、10月の消費税増税による価格アップや、ゴールデンウィークが10連休だったことによる旅行の長期化が、全体的な価格を押し上げたとも考えられる。

こうした費用データから推計した宿泊旅行費用総額は8兆121

宿泊旅行費用総額のうち4割を占めるのが現地消費。その現地消費の詳細を見てみよう(表2)。

宿泊プラン・ツアー以外で行ったことのうち、実施率が高かった上位3つは「エリア間、各エリア内の移動」「昼食」「直売所などでの買い物」。その次に「夕食」が50・7%で続いていることにも注目したい。この数字が意味するのは、旅行者の半数は宿以外で夕食をとっているということ。前年、前々年はともに40%程度だったことを考えると、いわゆる泊食分離がさらに進んでいることを感じさせる結果といえそうだ。

図12 宿泊旅行の同行者（単一回答） ※ベース：延べ宿泊旅行件数（単位：％）

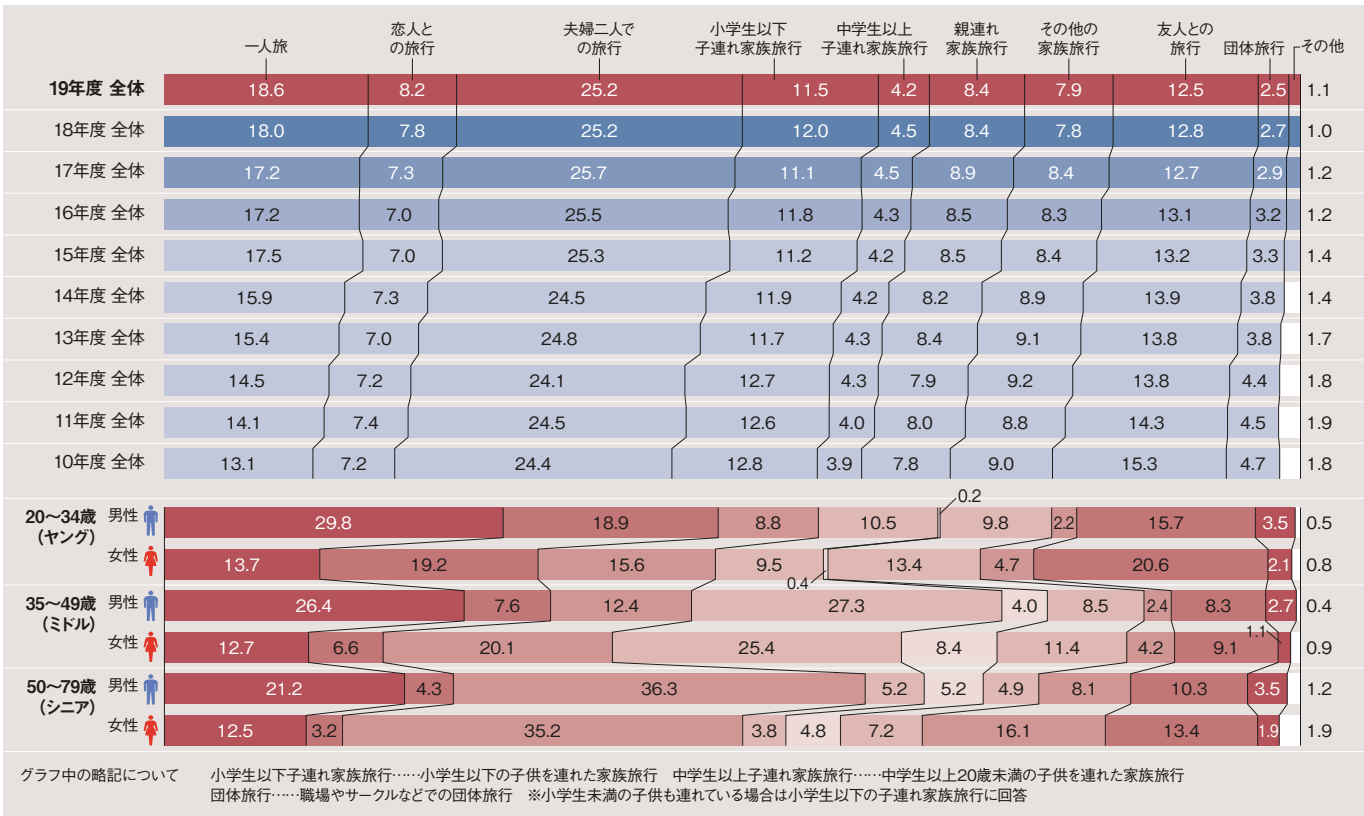


表5 一人旅の構成比の変化（性・年代別）（単位：％）

性・年代別		10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
20～34歳	男性	20.9	23.3	23.2	26.1	26.9	28.8	29.1	26.8	27.4	29.8
	女性	10.0	10.7	10.2	11.6	12.6	14.3	12.6	13.9	14.4	13.7
35～49歳	男性	18.4	18.5	20.9	21.9	23.0	24.8	24.2	26.2	24.5	26.4
	女性	9.4	8.2	8.0	9.7	10.1	11.7	11.3	10.7	12.1	12.7
50～79歳	男性	14.1	17.4	16.9	17.7	18.3	19.2	20.1	20.7	22.1	21.2
	女性	9.8	9.9	11.3	11.0	10.4	12.3	11.4	10.6	11.9	12.5

表6 恋人との旅行の構成比の変化（性・年代別）（単位：％）

性・年代別		10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
20～34歳	男性	20.2	20.4	18.8	18.9	19.1	16.8	16.6	17.0	18.7	18.9
	女性	17.6	17.8	19.0	17.6	17.6	18.0	16.0	17.6	17.2	19.2
35～49歳	男性	8.0	8.6	8.0	7.3	8.2	7.6	9.4	8.1	9.0	7.6
	女性	5.3	4.6	5.4	5.8	5.9	5.5	5.3	5.6	7.2	6.6
50～79歳	男性	2.9	3.2	3.3	3.3	3.7	3.7	3.6	4.1	4.2	4.3
	女性	1.9	2.0	1.9	2.2	1.8	2.2	2.6	2.8	2.4	3.2

表7 「小学生以下の子連れ家族旅行」構成比の推移（性・年代別）（単位：％）

性・年代別		10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
20～34歳	男性	9.2	8.7	9.3	7.9	6.9	8.8	7.8	9.9	9.8	10.5
	女性	16.7	15.5	14.3	13.4	13.4	11.5	14.4	11.7	12.3	9.5
35～49歳	男性	30.4	28.3	28.6	28.0	27.5	26.1	25.9	23.3	27.7	27.3
	女性	32.2	33.4	33.4	30.8	31.2	28.4	28.9	28.8	28.2	25.4
50～79歳	男性	4.1	4.7	4.6	3.8	3.8	3.7	4.8	3.9	4.6	5.2
	女性	3.6	3.0	3.6	3.2	3.8	3.7	3.4	3.2	3.9	3.8

図10 宿泊旅行の手配方法 ※ベース：延べ宿泊旅行件数

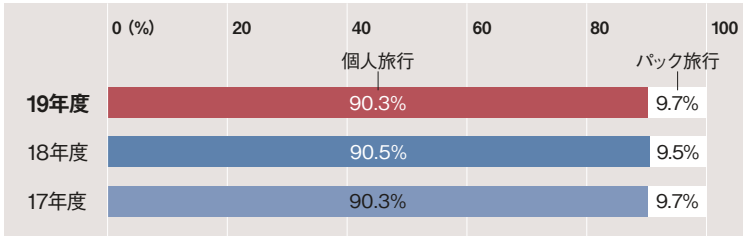
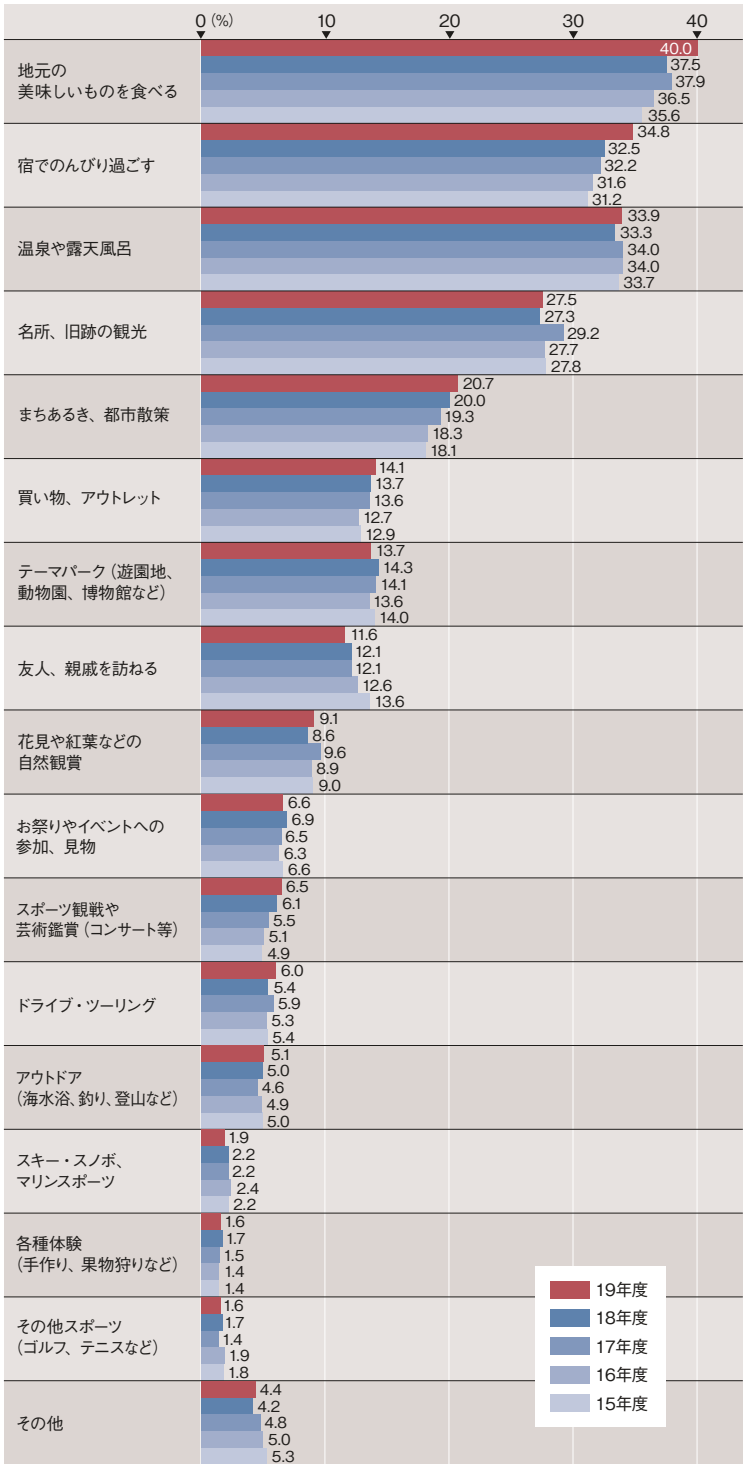


図11 宿泊旅行の目的（複数回答） ※ベース：宿泊旅行件数



「食」「宿でのんびり」はともにプラス4・5ポイントと全項目中最も大きく伸びている。また、5年単位で見ると「まちあるき」もプラス3・2ポイントと、「食」「宿でのんびり」に次ぐ伸びを見せている。性・年代別で見ると、「宿でのんびり」はヤング男女で、「食」はヤング・ミドル男性で、「まちあるき」はヤング女性とミドル男女の伸び

が大きい。近年、宿泊旅行実施率が上昇傾向にあるヤング男性で、他のアクティブな項目ではなく「宿でのんびり」や「食」が目的の旅をしていることには注目したい。旅の同行者（図12）を見ると、最も割合が高いのは今年も変わらず「夫婦二人での旅行」で、全体の約4分の1を占めた。続く「一人旅」

も前年度と比べてプラス0・6ポイントと微増。一時は上げ止まったかのように見えた時期もあったが、再びの増加で調査開始以来最高値となった。一人旅がとくに多いのは主にヤング・ミドル男性だが、とくにヤング男性では全旅行の約3割を一人旅が占めるまでになっている（表5）。また「恋人との旅行」も微増ではあるが8％を超えて過去最高値に。性・年代別では基本的にヤング層男女でそれぞれ約2割とシェアが高いが、実

はシニア男性でも増えつつあり、2009年度に3・2％だったのが今年度は4・3％と、10年で1・5倍近くになっている（表6）。一方で、「小学生以下の子連れ旅行」は前年度からマイナス0・5ポイントと微減。性・年代別ではヤング・ミドル女性とともにマイナス2・8ポイントとなっている。新型コロナウイルスにより春休み期間の旅行ができなかった様子を窺わせる（P15）の「月別データ」の項も参照。

表13 項目別に見た評価の高い都道府県ランキング

地元ならではの おいしい食べ物が多かった都道府県		
全体平均(前年度 60.9%) → 63.2%		
第1位	石川県	79.5%
2	北海道	78.9
3	宮崎県	78.3
4	山形県	77.2
5	高知県	77.0
5	沖縄県	77.0
7	青森県	76.4
8	香川県	76.3
9	鹿児島県	75.5
10	福岡県	74.9

石川県が3年連続1位。宮崎県が急上昇

1位の石川県は「のどぐろ」「カニ」「すし」などの魚介系が人気。2位北海道は魚介+「ジンギスカン」や「ラーメン」も挙がる。3位に躍進した宮崎県は「チキン南蛮」「(地鶏)炭焼き」「宮崎牛」など肉類で好評価。

子供が楽しめるスポットや
施設・体験が多かった都道府県

全体平均(前年度 25.3%) → 25.3%

第1位	千葉県	53.9%
2	沖縄県	44.3
3	和歌山県	40.5
4	長崎県	35.1
5	大阪府	31.5
6	三重県	31.3
7	宮崎県	30.8
8	北海道	29.6
9	福井県	28.8
10	山梨県	28.1

トップ3は12年連続変動なし

千葉の1位は15年連続。4ランクアップの長崎県はテーマパークが評価された。圏外からランクインの宮崎県ではリゾートホテルや高千穂峡、野球のキャンプ地が、福井県は恐竜に関するスポット名が多く挙がった。

地元の人のホスピタリティを
感じた都道府県

全体平均(前年度 24.8%) → 26.6%

第1位	沖縄県	47.9%
2	宮崎県	42.2
3	山形県	38.4
4	鹿児島県	35.3
5	香川県	34.1
6	北海道	33.9
7	熊本県	32.5
8	青森県	32.3
9	石川県	32.1
10	福島県	31.2

沖縄県の1位は不動。2位に今回大躍進の宮崎県

沖縄県は地元の人の温かさや観光客を歓迎するムードが愛され、高齢者に優しいという意見も。上位の県はいずれも「どこに行ってもみんな優しい」と評されるが、3位山形県は「地元の生活感」にも評価の声が。

魅力のある特産品や土産物が
多かった都道府県

全体平均(前年度 50.6%) → 52.3%

第1位	沖縄県	72.1%
2	北海道	66.7
3	鹿児島県	66.3
4	京都府	65.8
5	石川県	65.7
6	青森県	64.5
7	広島県	63.9
8	宮崎県	62.3
9	熊本県	62.0
10	長崎県	61.4

沖縄県が15年連続トップ。食の特産品が人気

1位の沖縄県は「ちんすこう」「紅芋タルト」のほか「シーサー」など工芸品も評価が高い。2位の北海道は海産物中心に菓子類も人気。その他府県も、酒、菓子、フルーツ、海産物など主に食関連が評価された。

若者が楽しめるスポットや
施設・体験が多かった都道府県

全体平均(前年度 27.9%) → 28.6%

第1位	千葉県	52.5%
2	沖縄県	51.2
3	大阪府	40.9
4	長崎県	35.5
5	東京都	35.3
6	和歌山県	34.5
7	宮崎県	33.7
8	北海道	32.6
9	福岡県	30.9
10	神奈川県	30.0

2005年度以来不動のトップ3

上位3府県ではいずれも有名テーマパークの名前が挙がるが、沖縄県では海のアクティビティ、また3府県共通でショッピングエリアも支持された。その他宮崎県の高千穂峡や日南エリアなどSNS映えスポットも人気。

現地でよい観光情報を
入手できた都道府県

全体平均(前年度 27.0%) → 28.4%

第1位	沖縄県	46.1%
2	宮崎県	40.3
3	青森県	38.3
4	北海道	36.4
5	石川県	36.0
6	京都府	35.7
7	香川県	35.3
8	鹿児島県	35.2
9	長崎県	33.2
10	富山県	32.9

SNSが新たな情報源として浮上

宮崎県、石川県、香川県がトップ10入り。ホテルや飲食店、観光地などでよい情報が得られたという意見が多いのは従来どおりだが、1位の沖縄県ではSNSとの回答も多く、情報発信の手段として存在感を示した。

魅力的な宿泊施設が
多かった都道府県

全体平均(前年度 44.4%) → 46.5%

第1位	大分県	68.4%
2	沖縄県	63.0
3	北海道	54.0
4	兵庫県	52.9
5	和歌山県	52.7
6	石川県	52.6
7	熊本県	52.4
8	群馬県	52.0
8	千葉県	52.0
8	神奈川県	52.0

5連覇の大分県はほか有名温泉、リゾートが強い

1位の大分県では温泉旅館名、2位の沖縄県では有名リゾートホテル名、3位の北海道は温泉またはスノーリゾート名。いずれも有名温泉地やリゾート地、テーマパークなど大規模な観光地を有する地域が上位を占めた。

大人が楽しめるスポットや
施設・体験が多かった都道府県

全体平均(前年度 42.0%) → 42.5%

第1位	沖縄県	59.1%
2	千葉県	55.3
3	京都府	52.6
4	宮崎県	50.1
5	長崎県	49.2
6	奈良県	47.6
7	石川県	47.3
8	鹿児島県	46.7
9	和歌山県	46.6
10	北海道	46.1

テーマパークや神社仏閣が人気

沖縄県は水族館や商店街、海レジャーなどのコメントが多い。2位の千葉県は有名テーマパーク、3位の京都府は神社仏閣の名前が多数。4位の宮崎県、8位の鹿児島県、10位の北海道が圏外からベスト10入り。

現地へのアクセスが
よかった都道府県

全体平均(前年度 47.2%) → 48.9%

第1位	大阪府	66.6%
2	東京都	65.2
3	神奈川県	61.2
4	福岡県	60.3
5	京都府	59.4
6	兵庫県	55.8
7	愛知県	53.6
8	宮城県	51.2
9	広島県	50.0
10	石川県	49.9

大都市圏または新幹線停車駅が並ぶ

上位7位までの顔ぶれは同じで基本的に大都市圏とその近郊がランクイン。新たにランクインした広島県、石川県もともに新幹線の駅があって大都市から1本の立地。実際に行ってみればアクセスのよさが分かる県だ。

表8 都道府県別延べ宿泊旅行者数
ランキング

	推計値
1 東京都	1,447 万人
2 北海道	1,091
3 大阪府	739
4 静岡県	665
5 長野県	630
6 神奈川県	584
7 京都府	549
8 福岡県	515
9 千葉県	510
10 沖縄県	474

表9 都道府県別延べ宿泊旅行者数
増加数ランキング

	推計値
1 福岡県	19 万人
2 福井県	16
3 宮崎県	10
4 滋賀県	5
5 香川県	4
6 岐阜県	2
6 石川県	2
8 島根県	1
9 栃木県	-2
10 佐賀県	-4

表10 都道府県別延べ宿泊旅行者数
増加率ランキング

	推計値
1 福井県	13.6 %
2 宮崎県	10.1
3 福岡県	3.9
4 滋賀県	3.7
5 香川県	2.9
6 岐阜県	0.9
7 石川県	0.6
8 島根県	0.3
9 栃木県	- 0.6
10 愛知県	- 2.1

表12 総合的な満足度の高かった
都道府県

全体平均(前年度 83.4%) → 84.8%		
第1位	沖縄県	93.1%
2	宮崎県	89.5
3	京都府	89.3
4	高知県	89.2
5	北海道	89.0
5	香川県	89.0
7	石川県	88.5
8	鹿児島県	88.4
8	大分県	88.3
10	兵庫県	88.1

旅行者減の苦境の中、
満足度の平均値は軒並みアップ

延べ宿泊旅行者数の多い都道府県ランキング(表8)は1位から4位まで3年連続変動なし。ただし今回、旅行者数が増加したのは8県のみで、他はすべての都道府県でマイナスとなり(表9)、東京都、神奈川県、千葉県では100万人以上減となった。新型コロナウイルス影響を含む、宿泊旅行者全体の減少を受けた結果といえるだろう。そんな中で健闘したのが福岡県。

旅行者数トップ10では唯一のプラスとなり、順位も2つアップした。延べ宿泊旅行者数の増加率でトップ3となったのは、福井県、宮崎県、福岡県(表10)。1位の福井県は県内の恐竜施設の人気もあつてか前年度比13・6%増。2位の宮崎県は、高千穂峡やサファリーに人気の日南エリアなどを中心に人が集まり、前年度比10・1%増を記録した。

道、九州、沖縄の3ブロックは比較的減少幅が少なく収まった。総合満足度(表12)では沖縄県が前年の2位からトップに返り咲き。2位には、旅行者数増に伴って7つの部門でトップ10入りと大躍進を果たした宮崎県が飛び込んだ。

その他、各部門の都道府県別満足度ランキングは表13のとおり。今回はすべての部門で全体平均が前年以上となっていて、全体的なレベルの向上が感じられる結果となった。

表11 居住ブロック別にみた宿泊先ブロック別の延べ旅行者数の増減(18年度→19年度)

(単位:万人)		宿泊先ブロック								
		北海道	東北	関東	甲信越・北陸	東海	関西	中四国	九州	沖縄
居住ブロック	全体 19年度	1,091	1,191	3,488	1,735	1,586	2,188	1,279	1,559	474
	18年度	1,134	1,294	3,931	1,842	1,705	2,424	1,424	1,616	533
	17年度	1,066	1,269	3,795	1,856	1,742	2,378	1,433	1,621	540
	19-18年度増減	-43	-103	-442	-107	-119	-236	-145	-57	-59
	北海道	-38	-1	-3	7	-3	-2	-4	-3	4
	東北	-42	-44	-43	-2	5	-22	0	9	3
	関東	18	-36	-157	-105	-18	-92	4	20	-27
	甲信越・北陸	2	7	-42	1	-3	-16	6	5	-4
	東海	6	-7	-63	-9	-49	-46	-54	11	-1
	関西	0	-23	-64	10	-40	-38	-34	-35	-22
中四国		3	-2	-49	-5	-7	-7	-59	-12	-7
九州		10	5	-16	0	-6	-17	-4	-49	4
沖縄		-1	-2	-5	-3	1	3	0	-2	-9

※ブロック別増減/・30万人以上:茶色網掛け黒文字、-0人未満:赤文字、+0人以上:黒文字
※全体増減/・100万人以上:黄色網掛け黒文字、-0人以上:赤文字

都道府県別

増減数プラスは8県のみ。増加率では福井県、宮崎県、福岡県がトップ3に

新型コロナウイルス影響による全国的な旅行者減を受け、多くの都道府県やブロックで増減数マイナスを記録。メジャーな観光地の多くが苦戦するなか、新顔が躍進を果たした。

表14 前年度比旅行増減率の月別推移（性・年代別、単一回答） ※ベース：1人あたり最大3回までの旅行件数（単位：％）

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
全体		3.0	12.0	-2.3	-2.4	-2.2	-1.0	-6.3	-8.0	-5.8	-2.3	-7.6	-57.0	-6.6
20～34歳	男性	15.2	10.0	-7.8	0.9	-3.6	1.8	-2.3	-1.5	-2.5	5.1	-3.1	-42.7	-2.8
	女性	3.5	24.1	4.2	5.8	3.9	0.1	-10.3	-11.8	-16.7	2.8	-5.0	-56.4	-5.2
35～49歳	男性	2.8	13.4	5.9	9.0	-2.2	-5.0	-0.6	-4.5	3.2	5.6	-11.8	-47.1	-2.5
	女性	17.7	13.9	-6.4	-7.9	-4.6	-9.9	-12.0	0.1	-3.8	-21.6	4.6	-66.5	-8.6
50～79歳	男性	-1.0	10.1	1.5	-3.8	-4.7	0.5	-7.1	-10.1	-10.0	3.1	-3.7	-57.9	-7.1
	女性	-3.3	8.4	-7.3	-8.9	-0.2	1.6	-5.3	-10.6	-3.6	-6.7	-17.7	-61.5	-9.2

※全体より値の高い部分に黄色の網掛けをした

表15 月別、同行者タイプ別増減率（単一回答） ※ベース：1人あたり最大3回までの旅行件数（単位：％）

19-18年度の増減率	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
全体	3.0	12.0	-2.3	-2.4	-2.2	-1.0	-6.3	-8.0	-5.8	-2.3	-7.6	-57.0	-6.6
ひとり旅	-4.1	13.6	-2.5	2.0	6.1	1.5	7.3	-2.1	-0.9	-0.1	4.9	-58.3	-3.6
恋人との旅行	3.9	15.8	-3.2	14.0	2.7	-0.9	-13.9	-5.1	-3.7	8.8	-0.2	-40.5	-2.1
夫婦二人での旅行	-3.5	7.2	-2.7	-4.6	0.6	4.8	-8.3	-13.0	-8.4	4.8	-4.1	-53.3	-6.6
小学生以下連れ家族旅行	13.8	18.1	-12.7	-4.5	-6.5	0.9	-13.7	-17.1	-10.2	-16.0	-19.0	-62.4	-10.4
中学生以上連れ家族旅行	23.7	31.2	4.7	-22.5	-7.7	-27.0	-5.8	-28.5	7.9	-31.2	-20.2	-44.3	-11.2
親を連れた家族旅行	-2.0	20.5	-6.5	-5.5	-19.0	10.2	-8.3	5.5	-7.4	4.5	11.9	-66.9	-6.6
その他の家族旅行	16.2	34.6	1.0	-8.3	8.3	-19.3	-3.4	0.3	-13.0	1.7	-12.0	-64.8	-5.3
友人との旅行	3.3	0.1	6.3	3.3	-4.0	-4.2	-7.1	-13.6	-8.5	-7.0	-23.1	-59.6	-8.8
団体旅行	-10.6	-34.5	-4.6	-5.8	15.2	19.2	-20.2	-6.0	6.2	-16.0	-26.5	-61.8	-13.3
その他	111.6	5.2	-17.2	-14.8	-2.0	-19.3	22.4	17.3	24.4	54.5	-4.3	-52.9	7.0

※全体より値の高い部分に黄色の網掛けをした(その他以外)

表16 月別、宿泊先ブロック別旅行増減率の推移（単一回答） ※ベース：1人あたり最大3回までの旅行件数（単位：％）

19-18年度の増減率		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
宿泊先ブロック別	全体	3.0	12.0	-2.3	-2.4	-2.2	-1.0	-6.3	-8.0	-5.8	-2.3	-7.6	-57.0	-6.6
	北海道	1.8	12.3	0.8	-0.9	9.7	17.6	-1.7	23.2	-6.5	-7.1	-21.1	-64.3	-1.4
	東北	10.6	10.3	-4.5	4.8	2.1	-8.1	-0.2	-14.2	4.5	14.9	-17.0	-45.2	-3.0
	関東	4.4	8.7	-0.1	-6.2	-11.1	-11.1	-9.9	-16.6	-11.5	-0.5	-8.3	-69.1	-12.1
	甲信越・北陸	12.5	11.0	-3.8	-16.0	0.5	12.2	-14.7	-12.9	-4.1	-20.9	-4.0	-50.2	-6.5
	東海	-1.3	10.5	-7.3	4.8	10.2	6.9	-8.2	-6.1	4.7	2.2	-5.6	-56.2	-4.6
	関西	2.8	19.0	-7.5	-2.6	-6.6	6.1	-7.8	0.2	-2.9	-6.9	-1.2	-57.9	-5.6
	中四国	-5.3	8.4	-2.6	-5.8	-9.1	-1.0	6.6	-5.1	-2.7	0.0	14.3	-40.5	-4.1
	九州	1.7	21.1	-1.0	12.0	-7.8	-18.9	-0.4	-4.6	-6.2	22.3	-0.3	-45.2	-3.5
	沖縄	-4.3	4.5	22.3	8.5	22.3	4.2	-8.0	-27.0	-19.6	-28.7	-39.7	-63.3	-12.3

※全体より値の高い部分に黄色の網掛けをした

「小学生以下連れ家族旅行」や高齢の「親を連れた家族旅行」が大幅に減少している。ちなみに「小学生以下連れ」が最大シェアを占めるのがミドル女性の旅。こうした旅が見合わされた例は多そうだ。一方で、「夫婦二人」や「中学生以上連れ」などの旅行は減少率が低めで、影響がやや小さい。

ブロック別宿泊旅行件数では、5月に増加率が高かった宿泊先は北海道、関西、九州ブロック（表16）。なかでも増えたのは関西・中四国↓九州、九州・東海↓関西、関西↓北海道への旅行で（P16表17）、大型連休で比較的遠方への旅行が増えたといえそうだ。

新型コロナ影響の出始めた3月の旅行では、とくに北海道、関東、沖縄ブロックでの減少が大きく、観光施設の営業が止まった都心や遠方への旅行が控えられた可能性が考えられる（P16表18）。一方、東北や関西、九州の域内旅行はマイナス30％～マイナス40％と、やや持ちこたえた。

その他では、9月～11月の関東ブロックの減少や、10、11月の甲信越・北陸ブロックの減少はやはり台風の影響だろう。また10月以降は沖縄ブロックで大きな減少が

2019年度の主な出来事

4月、5月 □改元に伴う休日増により、ゴールデンウィークが10連休に。

6月 □新潟県村上市で最大震度6強の地震が発生。
□大阪府でG20が開催される。

7月 □大阪府の『百舌・古市古墳群』が世界文化遺産に登録される。

8月 □『あいちトリエンナーレ』開催。
□高速道路でのあおり運転を強要容疑で初の立件。
□九州北部（長崎県、佐賀県、福岡県）で大雨被害。

9月 □台風15号により千葉県内に大きな被害が出る。
□ラグビーワールドカップ開催（～11月）

10月 □消費税率10％がスタート。
□台風19号により関東から東北にかけて大きな被害が出る。
□沖縄県の首里城が焼失。

11月 □新天皇即位に伴う各種行事が開催される。
□ローマ教皇フランシスコが来日。

1月 □新型コロナウイルス流行で封鎖の武漢からチャーター便による帰国開始。

2月 □新型コロナウイルス流行が指定感染症に。国内で初の死者。

3月 □東日本大震災以後運転を見合わせていた常磐線が全線復旧。
□新型コロナウイルスの流行に伴い東京2020オリンピック・パラリンピックの延期が決定。



月別データ

1

新型コロナの他にもある月別データに見る、好影響、悪影響

多くの人が旅行した大型連休や、旅行控えが起こった台風、そして新型コロナ。旅行行動に影響を与える出来事が起こったとき、誰が、どんなふうに反応したのかを、月別データをもとに見ていこう。

台風や新型コロナでは女性がとくに敏感に反応？

年度末の新型コロナ流行の影響は大きいですが、2019年度には他にも、観光産業に影響を与える多くの出来事があった。ゴールデンウィークの大型連休やラグビーワールドカップなど、観光を活気づ

けるイベントがあった一方、地震や台風などの自然災害や消費税率アップもあった1年。月別データについては、こうした出来事と照らし合わせてつつ見ていきたい。まず、前年同月と比べた旅行件数の増減を性・年代別に見ていく（表14）。全体では10連休のあった4月、5月で増加しているが、と

くに4月はヤング男性とミドル女性、5月はヤング女性とミドル男女で増加率が高かった。5月以降は全体的に減少傾向だが、ゴールデンウィークの長期旅行に費用をかけた反動かもしれない。10月、11月はさらに減少率が高くなったが、これは秋に連続して起こった台風被害の影響があり

そうだ。性・年代別ではとくに9月、10月のミドル女性、10月～12月のヤング女性の減少率が高い。3月の約6割という大幅減はもちろん新型コロナの影響だが、とりわけ減少率が高いのはミドル女性とシニア女性。いずれも旅行実施率（P6図2）の低下の大きかった層であり、新型コロナに敏感に反応した層と考えられる。なおシニアを50～64歳と65～79歳に分けると後者の減少率がより大きく、ハイリスクとされる高齢者層が旅行を控えた様子も見られる。

長い連休の旅はより遠方へ家族と行く旅がとくに増加

同行者別の増減（表15）では、4月出発の旅行で、「小学生連れ」「中学生以上連れ」の旅行が大きく増加、5月も「夫婦二人」以外の家族旅行が2、3割増えていて、「恋人との旅行」の増加率も高い。ゴールデンウィークの時期にとくにこうした旅行が多かったといえるだろう。

年度末の新型コロナの影響について見ると、2月の段階で「友人との旅行」や「団体旅行」がまず2割以上減少。3月に入ってから、家族旅行の中でも子供が小さい

2019年度の国内宿泊旅行実態

表17 居住ブロック別にみた宿泊先ブロック別の延べ旅行者数の増減数
(18年5月→19年5月)

(単位：万人)		宿泊先ブロック									5月計
		北海道	東北	関東	甲信越・北陸	東海	関西	中四国	九州	沖縄	
居住ブロック	全体 19年5月	83	97	260	144	127	166	107	115	37	1,136
	18年5月	74	88	239	130	115	139	99	95	35	1,014
	増減率	12%	10%	9%	11%	10%	19%	8%	21%	5%	12%
	北海道	2%		-30%							
	東北	-38%	-5%	-5%	45%		15%				
	関東	21%	29%	7%	8%	2%	17%	41%	22%	11%	
	甲信越・北陸	-11%	-9%	19%	14%	21%	-53%	-2%			
	東海	5%	18%	29%	17%	-2%	37%	-15%	-19%		
	関西	111%	-23%	-9%	8%	50%	17%	-10%	30%	-37%	
	中四国			12%	8%	34%	12%	23%	52%		
	九州	-8%		33%		58%	92%	9%	13%		
	沖縄										

※前年の件数が3万件以下のセルは非表示とした
※全体では、増減率が全国の前年増減率(12%)を超えているものに黄色の網掛け
※ブロック別では、30%以上増加したセルに茶色の網掛け

表18 居住ブロック別にみた宿泊先ブロック別の延べ旅行者数の増減数
(19年3月→20年3月)

(単位：万人)		宿泊先ブロック									3月計
		北海道	東北	関東	甲信越・北陸	東海	関西	中四国	九州	沖縄	
居住ブロック	全体 20年3月	20	32	78	47	52	58	44	52	12	395
	19年3月	56	58	252	94	119	137	74	95	34	920
	増減率	-64%	-45%	-69%	-50%	-56%	-58%	-41%	-45%	-63%	-57%
	北海道	-54%		-50%		-92%					
	東北	-94%	-37%	-75%							
	関東	-71%	-51%	-60%	-45%	-49%	-57%	-52%	-48%	-42%	
	甲信越・北陸			-86%	-49%	-58%	-70%				
	東海			-72%	-55%	-57%	-61%	-60%		-73%	
	関西			-72%	-46%	-61%	-30%	-4%	-54%	-76%	
	中四国			-75%			-79%	-49%	-73%		
	九州			-77%			-82%	-26%	-37%		
	沖縄									-75%	

※前年の件数が3万件以下のセルは非表示とした
※全体では、増減率が全国の前年増減率(-57%)を下回っているものに黄色の網掛け
※ブロック別では、70%以上減少したセルに茶色の網掛け

表19 その他注目の月別データ(単一回答) ※ベース：1人あたり最大3回までの旅行件数

19-18年度・平均値の差	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年間
宿泊数	0.11	0.14	0	0.02	0.03	0.04	0.06	-0.05	-0.01	0.04	-0.13	-0.25	0.02
※前年差プラスの上位2位までに緑の網掛け、マイナスの上位2位までに黄色の網掛けをした (単位：泊)													
同行人数・合計	-0.1	-0.2	0.0	-0.1	0.0	0.0	-0.1	-0.1	0.1	-0.3	-0.2	-0.4	-0.1
同行人数・大人	-0.1	-0.2	0.0	-0.1	0.1	0.0	-0.1	-0.1	0.1	-0.3	-0.2	-0.3	-0.1
同行人数・子供	0.0	0.0	-0.2	0.0	-0.1	-0.4	0.0	0.0	-0.1	0.2	0.0	-0.3	-0.1
※前年差マイナスの上位5位まで(同率含む)に黄色の網掛けをした (単位：人)													
全旅行者の大人1人あたり宿泊旅行総額	300	4400	4000	-1600	1600	1700	2200	400	-3300	2800	200	-5400	1300
全旅行者の大人1人あたり現地消費	300	1800	1100	-900	900	1800	1500	-700	-1400	500	300	-1400	500
個人旅行の場合の大人1人あたり宿泊旅行総額	500	4800	2900	-1600	0	1200	1600	-900	-3900	1900	100	-5600	700
個人旅行の場合の大人1人あたり現地消費	200	2100	300	-1000	700	1400	1100	-900	-1600	300	600	-1600	400
※前年差プラスの上位5位までに緑の網掛け、マイナスの上位5位までに黄色の網掛けをした (単位：円)													

見られたが、首里城焼失による影響もありそうだ。

長めの旅行で費用もかけたGW旅行単位が小さくなった3月

その他の気になるデータは表19にまとめてみた。

4、5月の宿泊数は前年同月よりやや多め。費用については個人旅行の総額が前年同月より4800円高く、全旅行者の総額も高い。やはり前年より費用をかけ、長めの旅行をする傾向が見られ、10連休の効果はあったといえそう。

新型コロナウイルス影響については、平均同行者数に注目したい。3月は前年同月と比べて0・4人減と多人数での旅行が避けられる傾向。また、1旅行あたりの宿泊旅行総額も低く、旅行をしたとしても全体に小規模になった印象だ。